

く自由の眞の源泉である。純なる親心は正義を實行し、自由を愛する氣高い政治力の源泉である。教育や陶冶に於ける自由も子心や親心としての愛に基き、子供の自然の發達の法則に即應し、個性に適した教育や陶冶が行われる所に體得されるものである。自由とは或る意味に於ては、人や物を其の本性に一致して取り扱う所は、人や物が其の本性に即して取り扱われる所に味われる心境である。愛は愛を生み、自由は自由を生む。子供が其の發達の自然の法則に即して教育されたならば彼はやがて此の態度を人や物に活用するようになる。物を其の本質に即して取り扱い、人を其の本性に即して敬重し、人の自由をも尊重するようになるのである。自然の法則と一致するということは、自然の法則が人間に一致するのではない。人間自身が自主的自發的に色々工夫して、法則を發見し、夫れに自ら一致する行動をなすのである。こゝに人間の責任というものが起つて來るのである。其の事の成否は自分達の責任となるのである。又人間相互の關係に於ても、自己の本務を果たす所に自由が味われるのであるが、社會人として自主的に行動する所に責任が生じてくるのである。子供の立場に於ても同様である。彼等は自分達の本性に即して、自主的に、自發的に仲間と親和し、協力して、朗かに歡

喜を以つて、程度に應じて其の本務を盡くすように行動する所に、自由な體驗を感ずるのであるが、其處には常にだんだんと高い程度に進むべき責任感というものが裏付けられて行かねばならない。自由と責任とは一枚の着物の表と裏とであり、車の兩輪である。自律的な生活に達し得る兩翼である。ベスタロッチの學園に於ては、子供達の學習して居る有様は遊戲のようにも思われたということであるが、これは彼の朗かな楽しい自由な空氣を言つたものである。賞與や罰則の外的手段に縛られることがなく、學習其のものに興味を感じ、學習と一體になり、没我的に楽しんで勉強して居る姿は實に學習を愛する所の愛の自由な學習である。畢竟ベスタロッチは子供の自發心を促がし、個性に適するよう注意し、自然の發達の法則に即して教育していたからである。

そしてすべての子供達を公平に取り扱い、公平に愛を注ぎ、子供達は互に教えたり、教えられたりした。仲間の妨害をなしたり、靜かにすべき時に騒いだりすることは正しいことではないというように躰けられた。民主社會に於ては、秩序が大切である。ベスタロッチは學習に於ても、訓練に於ても、非常に秩序を重んじた。秩序をみだすもの、不正を行うものに對しては嚴格に注意した。正義や

自由や平等秩序など、という言葉の教育ではなく、これ等を師弟間の生活、子供達相互の間の生活、學園全體の生活の中に自然に體得せしめたのである。「生活は陶冶する」という彼の信念と思想は學園の生活のうちに實現されるように努力されたのである。結局は神に對する信仰は陶冶によりて得られる知慧の結果ではない。素直な清い心である。神はいます、親はいますという自然の呼びかけに、聽従する邪氣のない耳である。信仰は完成された教育の結果ではなく、人間の教育の最初の基礎である。神の子としての人間の本性は神性である。故に人間は自分自身を信じねばならない。本性の内部の神感を信する時に神と不滅とを信することになる。

國の政治に於ても、爲政者は常に神の心を心とする献身的な親心を以て民衆の福祉を圖らねばならない。殊に家庭に於ては、信仰の美しい姿が其の中心とならねばならない。家に於ける父の正しい悦樂、母の歡喜に充ちたる信順、子供達の感恩の心情は實に神に對する信仰の結果である。併し神に對する信仰は突然勃發するものではない。神を信する前に先ず以て人を信じねばならないのである。神を愛し、神を敬い神に感謝し、神に信賴し、神に従順であるように高められる前に、われわれは

先ず以て人間を愛し、人間を敬い、人間に感謝し、人間に信賴し、人間に従順であらねばならない。自分が毎日見て居る家の兄弟を愛せざるものは、見えざる天の父を愛することは出来ない。然らば、われわれは如何にして人間を愛し、人間を敬い、人間に信賴し、人間に感謝し、人間に従順なることが出来るのであろうか。これは實に子供と其の母親との關係から自然に湧いて出るのである。

二、母親と子供との關係

母親は子供を護り養い安らかにし、悦ばせる。これは母親が自然に斯くせねばならぬように、本性づけられているのである。已むに已まれぬ眞實心の現われである。親心の自然の發露である。母親は子の要求するものを充たす。子に不愉快であるものを遠ざける。子が自ら出来ないことはこれを助ける。子は母から色々の助けや世話を受け、こゝに母に對する愛の芽が子供のうちに開發される。子供がまだ見たことのないものが目の前に立つ。彼は驚き怖れて泣き出す。母は固く子供を胸に抱きしめて彼をあやしすかす。泣き聲は弱まるが、眼はまだ涙でぬれている。其の見慣れないものが、

再び現われる。母はまた子供を腕に抱き上げて笑いながら怖くないよとだましますかす。子供は漸く晴れやかな曇りのない眼で母の微笑に答える。ここに母を信頼する芽が子供の内部に開發される。

母は子供のために用がある毎に子の搖籃に急いで行く。乳が子供に必要な時にはこれを與え、渴いた時には飲ませる。母の近づく足音を聞くと子は泣きを止める。母を見ると口を動かさず、手を伸ばして、求むるものが充たされる。母ということゝ充たされるといふことは子供には一つである。こゝに子供のうちに感謝の芽が生ずる。

愛と信頼と感謝との芽はだんだんと伸びて行く、母に似て見える人に愛着する。母に似たものは善いものと感ずる。母の姿に微笑むと同時に人間の姿に微笑む。母が愛する人を愛するようになる。ここに人間愛、同胞愛、友愛の芽が彼の内に開發される。斯くて子供のうちに又母が敬うもの、母が信頼するもの、母が感謝するものに對しておぼろげながら、尊敬し、信頼し、感謝する所の心情が芽生えて来る。

従順は天性的なものであるが、單にそれだけではない。愛には要求が、信頼には配慮が、感謝には

施與が先行すると同じく、従順には強い渴望が先行する。子供は待つことの先きに叫ぶ。従うことの方に先きに辛抱がある。辛抱ということが従順の前に開發される。辛抱がない所には従順が開發されない。乳を求むる子供はお待ちなさいと言つて母が胸を開くの待たねばならない。抱き上げて呉れるまで僅かの間でも辛抱せねばならない。こゝに従順の芽が生ずるのである。

實に人類の發展は感覺的要求の満足に對する強烈な渴望から出發する。母の胸はこの感覺的渴望の最初の嵐をしずめて愛を、信頼を生み、怖れを去りて、感謝を芽生えしめる。母は彼の亂雑な渴望に對して容易に挫けがたい態度を示す。彼は暴れたり泣いたりする。併し母は屈しない。子供はもう泣くことを止める。自分の意志を母の意志に従わせる。これは辛抱の最初の芽である。これ等の従順と愛、感謝と信頼とが合致し、融合する所に良心の最初の芽が生ずるのである。愛して呉れる母に對して暴れるのは正しいことではない。善いことではないという心情が起つて来る。母は唯だ子供自身のためのために世にあるのではない。すべてのものは唯だ子供自身のためのために、世にあるものではない。この感情の最初の影が生ずると同時にまた、子供自身にもまた自分のためにのみ世にあるのではない

いという感情が芽生えて来て、ここに義務と権利の最初の影が発芽するのである。これ等は母子の間に自然に発芽する道徳的なもの、最初の姿である。而かも此の中には神への歸依が含まれて居る。其の内部に潜んで居る。神への信仰、神への歸依は其の本質に於て母への信頼母への歸依を生むものと同一の芽である。

稍長じて子供はもう母は自分には必要でないという感じを起こす。母はこの時に子供に言つてきかす。御前はもう私を必要としない時に、御前に必要となるのは神様である。私が御前を保護することが出来ない時に、御前を保護してくださいるのは神様である。私が御前に幸福や、喜びを與えることが出来なくなる時に、御前を腕に抱いてこれを與えてくださるのは神様である。子供には神に對する眼が開かれ、歸依信仰の軟かな心情が動き出る。母の胸で芽生えた愛、信頼、感謝の情が擴がつてだんだんと神に對して向けられる。母の眼の中に神の眼の光を見る子供は、これまで母のために正しい行をなしたことが神のために、神意を正しく行うというように従順の態度を擴張して来る。

併し此の頃はまだ安心の出来ない時期である。子の父は或は戰場へ趣き、或は世間で働く。母は今

日は何んとなし不機嫌である。明日は訪問のため外出をする。子供は退屈をする。女中に物を尋ねても女中は軋事をして呉れない。遂には妹と玩具の争をなすというような事が起る。これ等の時期に於ては、頭の教育、理性の教育よりも心情の教育、感覺の教育が必要である。徐々と事物について感覺の修練をさせ、其の中に神を示すことが必要である。會つては母は子を其の胸に抱いて、神の名を廻らぬ舌が呼ぶことを教えたが、今や母は萬物を愛し、萬物に恵を垂れる神の姿を、美しい朝日の中に小河の波の中に、木の繊維や、花の中に、草木にかくれる露の雫の中に示さねばならない。外界の事物の中に神を示すのみではなく、子供自身のうちにあるものについても神を示さねばならない。子供の輝く眼の光も、彼の柔かな關節も、彼の口の音や、聲も皆神様の御力によるもので、人間が人為的に作ることの出来ないものであるということを感じさせる。そこで子供の心情は清く高まり、神の姿の現われる世界を愛し、神のある世界に對する悦びと、自分のうちにある神に對する信仰とが融合し、彼は神と世界と、母とを同じ心情を以て包むようになる。そして自分自らも此の中に溶けて居るのである。

誕生の日以來、母が其の胸や搖籃に居る子に對して微笑んだ口、誕生の日以來度々朗かな喜びを示した聲、此の母の口や聲は、今は子供に話すことを教える。子供を愛に充ちた胸に抱き上げた母の手は、今や子供に色々の物の姿を見せる。子供は母の手によつて示されたる色々の物を言葉で意識する。ここに知性の成育の第一歩が開かれる。斯くて子供は學び、子供は知り、子供は物の名を呼ぶ。更に名を名づけようとする。母に彼と共に學ぶことを促がす。母は子と共に學ぶ。斯くすることによつて両者はだんだんと認識の力、及愛に於て高まつて行く。

また母は子と共に技術の初歩の基本である直線や曲線を書くことを試みる。子供は間もなく母よりも上手になる。ここに新なる力が子供のうちに湧いて来る。子供はだんだん圖を描き、物を測り、計算することを覚える。母は曾つては世界を眺めつゝ其の中に神を示したが、今や圖畫、測定、計算のうち神の姿を示す。これ等を學ぶ時の完成の中に神の姿があるのである。神は絶対完全である。完成の法則は神が世を救い、人を幸にする攝理の法則である。子供はこの完成の姿、この完成の法則を自分が完成した直線と曲線とのうちに體驗する。一語の發音でもそれが完全に發音されるなら、其の

うちに神の完全性が體驗される。個々のものゝ完成への不斷の努力を基礎とすることが神の姿に一致する教育である。ベスタロッチーの教育に於ては、徐々に急がずに必ず一つのことを完全に覚えさせることが高唱されて居るのであるが、これは、この完全、完成ということは神の姿であるので、一語の發育の完成も、一直線の完全な描き方も、音や線の完全なものを覺える外に、此の完成完全ということとは子供の神性の開發であり、神の姿に一致する歩みであり、神への信仰の生きた生活其のものである。斯様な知能の開發發展は、同時に宗教的教育であるのである。適確な直線、確實な練習、自發的な、一步一步と完成への努力は實に知能の發展と共に宗教的情操涵養の道である。凡てを粗末に、未完成に終るものには知能も發展せず、信仰への道も開かれない。

人はたゞ自分のために世にあるのではない。人は其の兄弟の完成によつて自分を完成する。子供は家庭に於て其可愛い妹の先生ともなり、また母の手助けともなる。妹の完成、母の完成が同時に子供自身の完成となる。斯くして人間愛の崇高な道が開かれる。母は丈夫な達者な子を去つて、病める子供の枕頭に座す。達者な子は母のこの態度を正しく寛容する。進んで自分も母を助けて病氣の弟妹の

ために盡くすようになる。同胞愛、人間愛が生活のうちに體驗され、擴がつて行くのである。これは神の意志と一致するものである。自分のために生きるといふことは同胞のために生きることである。これは神を、永遠なるものを信ずる生活である。神を信じ、神を敬い、神を愛し、神に感謝し、神に従順なるほど自分という小我を失うのである。自分の大我的な眞實性としての神性的本質と、人類との一致を體得し、不死不滅の確信となる。

ペスタロッチーの教育の根本思想は、以上に述べたように、人間の本性は神性であり、神の信仰其のものの芽生えは知識による結果ではない。人間の天賦の賜物であり、其の開發伸長が凡べての教育の基礎であり、又教育の最後の目的でもある。知力其の他諸々の能力の發展過程に於ても常に宗教的情操としての完成へ努力し、神性充實の努力がなされねばならぬというのである。

以上は主として彼の名高い著述、「隱者の夕暮」や「ゲルトルートは如何に其の子を教うるか」によりて、其の主要なる點を論述したのであるが、彼の教育思想を平易に簡明に言い現わして居るものの中に、千八百十八年一月十二日、七十三歳の誕生日に於て試みた講話がある。學術研究として彼の

思想を難解な、哲學的な言葉や、論理で體系づけることは研究家の隨意である。學術的興味満足として獎勵してよいのである。

併し、彼は元來が理論的な哲學者ではない。むしろ哲學の實行家である。人間救済、殊に貧兒貧民の救済が生涯の念願であり、其の根本とする基礎教育は、餘り教養のない母親でも、女中でも、臺所の仕事をなしながら、生活上の仕事をなしながら子供を教育することが出来るようにと、教育の徹底的な普及を目指して居る。「リンヘルトとゲルトルート」の教育小説の如きも、教育精神、教育方法を廣く一般の人に了解され、實行され易くするために、小説的に書いたものである。私は今學術研究、教育學建設の目的の下にペスタロッチーの思想について論述して居るのではない。彼の精神をくみとつて出来るだけ平易に、彼の思想を成るべく多くの人に、了解して貰いたいために筆を執つて居るのである。此の故にこれまで隨所に紹介せるものと稍重複の嫌もあるが、此の千八百十八年の誕生日に於て試みられたる講話の要點をも次ぎに紹介して見ようと思う。

三、樹木と教育

二〇四

私の心は人間の教育の姿、民衆の教育、貧民教育の思に充ちている。

諸君、樹木を見よ、種子を土地に播く、それから根、幹、枝、小枝、果實を生ずる。種子の内部に樹木の精も、質も、生命も存するのである。其の種子の父は神である。豊かな土地の父も神である。其の種子を生長させるのも神である。

樹木は其の全存在に於て、已に其の根にあつた所の要素の宗全なる發展に外ならない。種子の中にある内的有機的生命は根に行き、根から樹心、樹皮、實というようにすべてのものが出来る。幹や枝や、梢には、常に同じ樹心と樹皮とがあり、各は明かに分離し獨立しては居るが、而かも繼續的に關係し、互に保護し、互に支持し互に養つて統一的な同じ組織的生活をなし、全體としての樹木との關聯を失わないようになつて居る。

人間の諸能力は樹木のように發達する。木の各の部分が有機的生命の力により、神の定めた統一に

於て互に親和協力し、以て美しい果實を生産する共同の仕事を完成する。丁度このように、人間に於ても、心情の力即ち愛と信頼との力は、知識、行動、技能、意志の諸力を統一して人間の諸力を調和的に發達せしむる。人間を眞の人間にまで陶冶するといふ最後の果實を生むのである。

神の子として生れた人間は、神のように完全にならねばならない。これに對して力あるものは肉體ではなく、精神である。此の力は或る特定の能力や、拳や、腦の中に潜在するのではない。其の力の統一點即ち眞の力は愛と信頼とに存するのである。この愛と信頼とが人間に知能や、行爲の力に統一的な姿を與え、人間を眞の人間となすのである。

愛と信頼は丁度樹木の根のようなものである。木が根によつて土地から榮養を吸収するように、愛と信頼は人間の發展に力を與える。根なくしては木に生長しない。愛と信頼とがなければ、人間は發達することが出来ない。人間は愛と信頼との力によりて、自分自身の肉體や、心からまた環境から生命の榮養を攝取して初めて發展の歩みをなすことが出来る。

土地が軟かく水分があり、太陽が照らす所には種子から根が生じ、芽が生れる。併し硬い水分のな

い土地や、日陰の地にまかれた種子は發達もせず、根も生じない。水分や肥料が餘り多過ぎて育たない。人間の場合に於ては、肉體的、感覺的な慾に走り、或は環境を自分のために有益に利用するか又はこれを自己破滅の原因とするかは人間の自由である。併し眞の自由は神の聲を内に聽く時の自由である。人間は木とは異りこの神聖なる自由なもの、何にが善、何にが惡かについての神の教を聽くことが出来る。神は愛と信頼と眞理と正義とを通して、人間が相互に一致協力して、神と一體になるように呼びかけ給う。そして人間は神性を發揮してこれに聽従する所に眞實の自由があるのである。

現代の人は隣人や、貧しい人や同胞の實狀を知らないで、知らなくともよいようなつまらないことを知つて居る。思索の力を練ることを怠り、六かしい形而上的な事柄を大言壯語することを好んで居る。職業的に勤勉である代りに、生れながら座食して居るものもある。これ等は皆われわれの神性を包む所の雲である。われわれが此の雲を追拂つて、神性の發達發揮に力むることが即ち新教育であり、教育の革新である。

神性の發揮發展は實行實踐である。信ということは信じられて居るものの知や、理解からではなく

實際に自ら信ずることから發達する。思惟は思惟されたるものについての知や思惟の法則からではない。實際に自ら思惟することから發展する。愛は愛せられるものや、愛についての知からでない。實際に自ら愛することから發展する。技能は能力について幾多の講説や談話からではない。實際に自ら爲すことから發展する。

實行實踐は親心の特質である。親は子供に理論や空理をきかして育てるものではない。自分の心身を勞して實踐的に育ぐくむのである。民衆の教育、貧民貧兒の教育の根本精神も親心でなければならぬ。神は人間の親である。神の心を心としての親心は人間教化、人類發展の基本精神である。此の意味に於て家庭は人間の諸力を陶冶し、神的に統一する中心であり、學校は家庭を基礎とし、家庭繼續としての役目をものである。

スキスの現状より見て教育上次のことが必要である。

一、家庭の父母は自ら子供を教育することが出来るという信念をもつべき事、また教育に興味を感じねばならない事。

- 一、母及家庭向きの書物を出版し、家庭に於て行われる教育上の精神を與えること。
- 二、人性の基本的機能に應ずる専門教育は人間性の自然への發達と一致すべき事。
- 三、民衆の陶冶組織を作る上に數、形、言葉を基礎的要素とすべき事。
- 四、手や眼の練習から始め、特殊なる職業的練習にまで導く所の體育系統の組織となるように力むべき事。
- 五、學校と家庭との聯絡は極めて必要である。家庭に正しい教育法を教うるために實驗學校を設ける事。
- 六、優秀にして信賴するに足る男女の教師を養成すること。
- 七、彼は最後にクリストのような愛の必要を説き、殊に自分の學園内に於ける教師達の不和に對して猛省を促がして居る。

要するに、神の子としての人間には神性が惠まれて居り、神に對する信仰は、一切の價值生活、文化生活、知情意の調和、心身全體の全人的な人間としての生活、社會生活の基礎である。それは知識

の結果ではなく、母子の間から湧き出する自然の聖泉である。従つて家庭は人類福祉の基礎であり、家庭生活の革新は人類社會の革新の源泉である。神性の開發、人間性の陶冶の方法は子供の自然の發達に即應し、直觀的に、具體的に、而も自發的に、明朗に、歡喜の雰圍氣の中に一步一步と徐々に完成されねばならない。一語一線の完成をもゆるがせにしてはならない。而かも凡べてに於て實行實踐が大切であるから、子供の基礎教育は生活其のものの中に行われねばならない。

四、生活は陶冶す

「生活は陶冶す」とはベスタロッチーの標語であり、また其の學園の教育の實際である。内部の自發的活動と周圍の環境とが織りなす所に入間の生活現象が現われる。そして此の生活は人の本性を伸ばすものでなければならぬ。既に詳述せるベスタロッチーの「リールハルトとゲルドールド」に於ける七人の子供の教育はゲルトールドを中心とする石工の家庭の生活によりての陶冶である。彼は又此の縮圖として善良なるヤッコブは如何に其の事を教うるかということについて書いて居る。

村外れの小さな丘の上に若干の見すばらしい古い家が並んでいる。朽ちはたてた梁の上に藁屋根が結びつけられ嵐の前に崩れかゝるような有様である。此の茅屋の中にエルスベスという一人の勇敢な女性が住んで居る。ヤコブは此の女性を知つて居るので、自分の子供を連れて彼の女を訪ねる。彼の女は糸車からはなれて愛想よく握手する。彼の女の傍には九人の子供が糸紡ぎをやつて居る。我慢強い小羊でも困るような狭い部屋の中に、九人の子供が行儀よく並んで糸を紡いでいる。彼等は皆愉快そうな顔つきで、明るい氣分で熱心に元氣よく車をまわしている。糸や梳れた綿は美しくまかれて居り、紡ぎ終つた粹綿は綺麗に並べられ、子供達は一生懸命で互に面白く競争して居るように見える。彼等の母エリスベスは夫を失ひ非常な困窮に陥つた。家の中には子供の外には何物もなく、子供達は何時も空腹であつた。併し今は神様の御助けでこの通り仕合である。彼の女は子供達をばげまし、自分と同じく糸紡ぎに精を出ださせ、秩序正しく規律よく一緒に座り、少しの時間も無駄にせず、勇氣と幸福とで作業に熱心し、最少のものから一切を導き出だすことに力めたのである。夫の死後若干の借金をしたが、今はこれを返済した。彼の女のパンを子供に與えたと子供はもう十分だ。お母さん

おあがりと言つて呉れる。そして子供は家の周囲の雜草をとつたり、小さい畑を耕やすので、生活にも都合がよく、健康にもよろしく、休みなき糸紡ぎにも弱ることはない。そして彼の女は子供が作業をして居る間に、宗教との回答示教や、讚美歌を教え字を書き、書物を読むように躑けて行つた。實に母を中心としての此の小さな貧しい家の生活は、子供達を陶冶したのである。信仰の篤い敬虔の母性は、太陽の光のように陰惨な家庭を照らし、信仰と感謝と愛の生活の中に子供達は喜んで、仕事をなしながら人間らしく伸びて行くのである。それは技巧的な方法ではなし得ない所の生活から来る自然の教育である。ヤコブは果物などを贈物として與え、自分の子供に此の實狀を見學させ、互に喜びに充ちて再會を期して立ち去るのである。

家庭のないものは實に不幸である。併し、家庭の中に育つても、其の生活の如何によりて、子供の性格が變つて來るのは自然である。母親が激情的な場合には、罪のない子供を徒らに叱りとばすような場合には、又不自然に濫りに、鼓舞するような場合には子供の無邪氣さ純真さが曇つて來て、自發活動に基づく諸能力も伸びる餘地がない。靜かな直觀の躑けをすることも出來ないから、健全なる思

考力の發達も覺束なく、正しい言葉遣も覺えないようになる。家庭に於て、謙抑、典雅、愛敬、信順平和の躰がない場合には子供は學校に於ては驕慢、輕卒、冷淡となり、仲間に嘲笑や侮辱などを加えることになるであろう。家庭に於て、注意、熟慮、靜思の習慣が養われない場合には子供達は學校に於ては、放心、不注意、無思慮、早計の人間となるであろう。身體上の方面に於てもだらしのないものとなり、市民としての生活に必要な協力、親和、熟練、努力、忍耐の精神も發達することが困難となる。學校と家庭との聯絡が必要であるが、先ず以て父母を再教育して立派な生活に基づく所の一切の教育の基礎を築かねばならない。

ペスタロッチーはルソーの影響を多分に受けて居るが、これは子供の自發的活動や、其の自然の發達に即應すべしというような方面に於て大に共鳴したであろう。併しルソーのエミールは孤兒であつて、両親をもたない。一人の教師によつて、社會とは殆ど没交渉に育て上げられるのである。

ルソーも其の當時の佛國の社會は階級的で、自己主義であることを痛感し、氣儘でない利己的でない所の人間を作ろうとしたのである。彼はエミールが其幼時何か欲しい物があつて、それが充たされ

ることを求める場合に、若し其の要求が正しくなかつたならば、いくら泣いても、叫んでも、暴れても絶対にこれを與えてはならないと説いて居る。若し子供が不正の要求であつても、暴れさえすれば充たされるものであるということを経験すれば、これがやがて利己的な氣儘な、横暴な非社會的性格を養うことになるのである。従來ルソーのエミールが、主として子供本位の方面を多く紹介され、教育の目的としての社會性を養成する方面が閑却されて居ることは残念である。子供の社會性を養うことについてはペスタロッチーも固よりルソーに共鳴する所であるが、ペスタロッチーは家庭の生活を教育の基礎とせる點がルソーと非常に異なる所である。ルソーは自分の子供を養育院に托したが、ペスタロッチーは自ら親しく其の教育に熱心したのである。ルソーは彼一流の理念を描き、ペスタロッチーは已むに已まれぬ親心で教育の革新に努力したのである。

第九章 ベスタロッチー精神を廻りて

一、愛の教育

前章に於ては、ベスタロッチーの人間觀を説き、それから自然に出發する教育思想を述べ、縦の方向に於てベスタロッチーを描いて見た。これと稍重複するが、彼の精神を一層明かに理解するために横の方面から、其の周圍から、彼の精神を廻つて、われわれの進むべき目標にも觸れて見ようと思ふ。

ベスタロッチーの性格には、彼自らも意識しているように、嚴肅と快活、親切と嚴格、熱狂的なものと平靜、謙讓と自我意識、温和の剛毅、冥想的な深思沈潜と活動的な生氣というように、一見互に相反するようなものがある。併しこれ等は彼の敬虔な宗教的信仰を中心としての愛によりて包まれ、愛によりて統合されて居る。

萬物の生成發展には太陽の熱と地上の水が必要である。宇宙には陰陽の二氣があり、地上には土と石即ち柔と剛とが必要であり、人間には仁と義とが大切である。これ等互に相反するように見えるものが、互に結合して相補う所に、すべては進歩發達し、而も人間の性格の中にこれ等の相反するように見えるものが融合統一するならば、其の性格も強靱となり弾力性を發揮することになるのである。ベスタロッチーの性格には、一見相反するもののように見えるものが、餘程極端になつて居り、そして強烈にして熱狂的な人間愛がこれ等を統合しているように思われる。故に彼と暫らく接觸すると、彼から發するものは鋭い印象となつて、人を感化する力が強かつたのであろう。また彼自身に於いては失敗や成功を超越して、其の所信を貫くために邁進する強靱にして弾力性に富む所の生涯を送つたのである。

彼は社會の革新、貧困者の救済を生涯の事業となし、其の解決の根本策として、教育の革新を圖り新教育の樹立と普及に力めた。彼の人間愛、彼の兒童愛が彼をして實際の教育者たらしめた。到る處爲す所、常に障害多く、外形的には相嘗失敗の跡が見られるのであるが、失敗や障害は却つて彼を鼓

舞し激勵する力となり、彼の初一念は生涯を貫いて不動であり、死の瞬間に於てさえ、人間救済のため苦惱し、自分の精神の一端でも實行するようにと子孫に遺言までしたのである。われわれは生活せねばならない。生活權の確保充實は必要である。併し職務の上に於ける教育精神としては、ベスタロッチーのような没我的の愛でなければならぬ。不撓不屈、失敗に碎けずして精進し邁進する所に愛からの勇氣がある。

愛は自他一如萬物一體の姿である。愛するものは愛せられるものの本性を其の内部から見る事が出来る。ベスタロッチーは子供を愛し、人間を愛したから、彼の本性を其の内部から了解し、其の自然の發達の法則を捉えることが出来て、これを教育に活用した。愛は實に知を生み、知を育てる力でもある。ベスタロッチーの豊富な思想も、愛の所産である。彼は神を信じ、神から恵まれていると信じていた。彼の兒童愛や、人間愛がなかつたならば、彼の思想は空虚なものであつたらう。又愛は愛を生むものである。彼の愛の教育は學園の子供達の間の友愛となり、諸國に於ける孤兒院や、貧兒教育となり、廣く人類界に愛の種子を蒔いたのである。愛は實に平和國家、文化國家建設の原動力である。

ある。人類の福祉に寄與する聖なる力である。

二、敬虔な精神

彼は神に對する堅い信仰を體得し、自分の仕事は即ち神の仕事であり、人への奉仕は神への奉仕であると信じていた。殊に教育の源は此の信仰である。神に對する信仰は其の素質に於て自然に神から恵まれたものであつて、教育の結果ではない。むしろそれは教育の基礎であり、源泉である。彼は常に宗教的敬虔の精神に充ちていたのである。

人は神の子であり、神性を恵まれて居る。この點に於て平等である。神性に恵まれている人は之を粗末にしてはならない。互に敬重しなければならぬ。ベスタロッチーの言う神の愛には敬という意味も含まれて居る。人間には親疎の別もあるもので、誰れに對しても直ぐにこれを愛するといふことは六かしいことであるが、人格をもつものとして、神性に恵まれているものとして、これを敬うことは困難ではない。また必ずこれを敬重し、尊敬すべきである。ベスタロッチーが其の學園に於て、子供

達相互の間に互に協力し、互に助け合うように教育したのは、其の宗教的な立場に於ての道徳観からである。

詩人ゲーテは其の名著ウイルヘルム・マイスターの遍歴時代の教育郷に於ては敬虔の精神を教育の中心となして居り、四つの敬虔の精神を擧げている。第一種の敬虔心は上なるもの即ち天に對する敬虔心である。自然の威力に對するもので異教的な敬虔心であり、また充分に眞の敬虔を體得し得ない所の少年達に於ける最初の段階のものである。第二種の敬虔心はわれわれの下なるものへの敬虔心である。少くともわれわれは謙讓の心を以て世の中の不幸な人々、悩み苦しむ人々へ救の手を延ばすというような愛の敬虔という意味に解釋される。ゲーテはこれを基督教的敬虔と名付けている。第三のものは賢哲の敬虔と名付けられている。これは周圍には人間同志の同胞が居り、われわれは孤立でなしに、上なるものはこれを引き下げ、下なるものはこれを引き上げ平等の人間として互に協力親和して社會のために奉仕するというような意味が含まれて居る。神性を人間同志の同胞のうち認める態度である。宗教的敬虔の社會化である。これ等三種のものが相互に密接に關聯して深く且つ篤くなつ

て行けば、最後に第四のものとして自己自身の神性を自覺し、これに對する敬虔心が湧き起つてくる。自己の神性に對する敬虔心が培われる所に又他の三種のものも、益々淨化されて躍動的となる。ゲーテはこれ等の敬虔心を中心に、農耕、工作などの勤勞的勞作や、音樂唱歌其の他の藝能的教育に重きを置いて居るのである。又測量や、計算や、色々の實際的な仕事や生活によりて、科學的精神も養われて居る。而かも凡べては體験的であり、生活教育であり、個性に即する適性教育であり、愛の教育、奉仕の教育である。ゲーテがベスタロッチの學園を知つて居つたとか、知らなかつたという色々の説は別として、このゲーテの教育ユートピアは實にベスタロッチの學園の生活に非常に能く似て居り、これを詩化したもののように感じられる。各方面に交際の廣かつたゲーテのことであるから、獨逸の青年教師が多數ベスタロッチの學園に留學することや、彼の學園の狀況などについて相當の説を聞いていたものとも想像される。殊に日夕互に親んでいたヘルダーは、ベスタロッチを相當に能く理解していたのであるから、ヘルダーなどからもベスタロッチのことについて聞いたことであろうと思われる。ゲーテがこの遍歴の巻を書いたのは千八百二十一年より千八百二十九年の間

であり、ベスタロッチーの死後二年に公にされたのである。これが若しベスタロッチーの在世中に公にされ、彼によりて讀まれたならば、ベスタロッチーはこれを何んと感じたであろうか。我が國に於ても學界及教育界の偉人廣瀬淡窓先生の如きは非常に敬虔心に篤い人であり、窮乏のドン底に陥つた米澤藩を復興した上杉鷹山公の如きも、敬虔其のもののような人である。これ等は私の近著「民主教育の本質」の中にも詳細に説いて居るので、ここに再説を見合わせることにする。

宗教的敬虔にまで深められて行くことは喜ぶべきことであるが、われわれは少くとも廣義の道德的敬虔心に充ちて居らねばならない。正しいことを實行し、正しさを追求し、正しいことに傾聴し、隨順する態度や、事物を粗末に取り扱わず、眞面目に熱心に仕事に没頭するのも廣義の道德的敬虔である。教室で子供達が討議する場合でも、其の正しい意見について敬意を表し、靜かにこれに傾聴する姿は一種の道德的な敬虔心の現われである。また其の教育の機會である。宗教的敬虔は文化に深さと永遠性を吹き込むが、少くとも道德的敬虔心のない所には一切の文化は創造されない、また文化の繼承維持も不可能である。

三、基礎教育

彼は英國から來て克蘭デイの貧兒教育に協力せるグリーヴスに宛てた幼兒教育に關する書簡の第三十二信に於て、教育の目的は人間を其の創造者に奉仕して、内面の良心の命する所に従つて活動させること、又社會に關しては彼を獨立自主的ならしむることによりて社會に對して有用なものとなすこと、個人としては内面的に幸福ならしむることである、と説いて居る。

このために、彼は宗教的、道德的、教育に最も重きを置いたのであるが、知識力其他頭腦力の開發發展其の調和的發展を企圖したのである。

數學にも非常な重要性を認め、シユミッドを其の主任として、優れた成績を挙げ、博物などに於ても觀察、直觀に基づき科學的な精神を養つた。歴史は一種の情操的な性質をもつ所の教科であるがベスタロッチーは、歴史に於て最も興味の深い事件は、不可能と考へられていた事が可能となつて成就することである。人類界に慈愛の努力を制限しようとすることは最も無益のことであるが、發明や

創造や、改善に限度を定めようとするのも實に無益なことであると説き、歴史上に於ける文化の創造科學の進歩という方面に大きな注意を拂つて居る。又藝能方面に於ても圖書は勿論、殊に唱歌、音楽に非常な教育力を盡めた。音楽は國民的感情を生動せしむるが、更にそれ以上のものがある。即ちそれが正しい精神に於て教養されるならば、あらゆる悪じき、偏狹な感情と、低級な嗜好と、人間として忌むべきあらゆる情緒を根絶する力をもつて居る。積極的には、至純なる歸依信順敬虔の情操を高揚し、技巧や修飾を用いずして自然に精神を淨化して豊かなものとするのである。

又社會生活に於て獨立自主的ならしむるには、市民として健全に生きねばならない。それには勤勞ということが必要である。家庭はあらゆる教育の基礎であるが、殊に家庭生活に於ける色々の作業に慣れしむべきである。糸紡ぎの如きも幼少の時から早く教えるがよい。勤勞作業は子供を眞の人間となし、年老いても到る處、其の作業を立てる所を家とすることが出来る。單に言葉で以て教育された子供は年老いて後何處へ行つても家は無い。人は喋ることよりもパンを必要とする。パンは働かずに勤勞なしには得られない。併しこれは單にパンが生きたるためのものみではない。われわれは他人の

經驗や知識を詰め込まれるのみならば、それは他人の眼で物を見、他人の頭で考へようなもので、自主的、自律的な力というものは養われない。自發的な勤勞其のものによりて人の自主力、自律力が具體的に伸びて行くのである。

ペスタロッチーは色々の教科について教えたのであるが、基礎の教育に於ては學科其のもの、實質的な知識を授けるのが目的ではなく、これによりて色々の精神力、能力を養うべきであると信じたのである。そして各教科を孤立的にバラバラに取り扱うのではなく、諸能力が有機的に關係があるように、各教科の間にも有機的關係が保たねばならない。

彼の學園は其の當時の綴字學校や、筆記學校ではない。形式的で精神のこもらない教理向益の學校でもない。實に人間學校であつたのである。市民としての十分なる資格、社會に對する奉仕の能力が養われ、各自に於ては、神の大地に於て、何人も彼等を助けず、又助け得ぬ時にも、自らを助け得るような力が培われたのである。

ペスタロッチーは出来るだけ教育の過程を單純化して、教育なき母親でも、女中でも家事にはげみ

ながら子供の教育をなし得るようと考へた。これも教育を普及して社會の革新を圖るためであつた。

敬虔な信心深い精神に基づいて、人間の諸能力を、心身を調和的に發達せしめようとする企である。知情意は各孤立的のものではないのに、これを別々に孤立的に取り扱う場合には、自然に反くことになり、本來眞實な全人的であるべき人間は分裂的となつて、我執、孤立、獨善、偏狹、無味、乾燥強いては利己的な性格となる。敗戦日本の教育を反省して見る時に、其處にはこのような人格分裂の弊がなかつたであろうか。其の結果偏狹な利己的な性格が作られたことはなかつたか。ベスタロッチーは前に述べたように、一語の話し方、一直線の描き方にも完全主義を期し、完全完成ということを得させたのである。神は絶對完全であり、クリストは此の世に於ける仕事を完成して天國へ招かれたのである。完全完成にはこのような大切な宗教的の意味があるので、一語一線の知能の教育に於てさへ宗教的情操を養ふことに心懸けたのである。又如何なる困難な事でも自發的に喜んで、其の仕事を完成するような根氣の強い意志力の鍛練にも力を入れ、知情意の有機的關係、眞の共働協力の

教育に力め、眞、善、美、聖一體の教育、心身一如の教育によりて、全人として調和的に發達せる市民を作ろうと企圖したのである。而も教育の出發點は出来るだけ直觀に重きを置き、全我的の活動や勞作を通して直觀の完成に力めた。一般に教育の方法は兒童の自然性に基礎を置くと共に、其の自然性から出發して、各自の個性に従い、其の自然性を伸ばして完成せしむるよう力めねばならない。素質や能力、要求状態の全範圍に於ける子供の自然性は方法の出發點であり、其の中心であると共に方法の目標でなければならぬ。直觀も教育法の出發點であり、また其の終結でもあるのである。彼のこの教育法は今日もなお生命をもつて居る。

四、生活による教育

全人的な人格は單なる知育の結果ではない。生活其のものによりて陶冶された結果である。ベスタロッチーの理想とせる所は、凡べてを寮に入れて、大家族としての生活によりて教育し、「生活は陶冶す」という彼の信念を實行に現わしたかつたのである。此の故に通學生に對しても、出来るだけ寮

生活内に導き入れ、食事を共にしたり、時に寮に泊らせることもあつた。

普通の小學校では塾や寮を設ける譯にも行かない。唯だわれわれは學校全體の生活というものを、正しく、明るい温か味のあるものとなし、教育基準法や學校教育法の趣旨に則り、生活の内容を充實し、常に秩序あり、紀律ある進歩的發展的の空氣を作り、又家庭や、社會と連絡して學校の生活を更新し、生き生きと伸びるようになりたいものである。

ルソーは彼の時代の家庭にも、社會にも、教育的意義を認めなかつた。兒童の自然性を主とする兒童本位であつた。ペスタロッチーも、母國スwisの社會には改善され、革新されねばならぬものが多く、社會の教育力については寧ろ悲觀的であつた。一般の家庭という小社會に於ても大に革新されねばならぬものがあるが、彼は幸にも自分の直接の生活體驗として、女性より大きな同情と支援とを得たるを以て、家庭に於ける女性母性の教育力の必要を認め、彼の學園の生活にも出来るだけ家庭的の生活を導き入れることに力めたのである。

今日我が國に於ける家庭や、社會の生活に於ても改善を要し、革新を要するものが少くはない。其

の改善、革新は即ち大きな教育力であるが、現在のあるが儘の家庭や、社會生活に於ても、之を注意深く研究する時は相當に教育力を發揮するものが少くはない。學校生活は家庭や、社會と密接に連絡を保ち、教育は國民全體の力にさるるようにならねばならない。われわれは社會觀についてはルソーやペスタロッチーと同じであつてはならない。兒童の自發性や、自然の發達や、個性を重んずると共に、兒童をして現在の社會や家庭の生活に順應せしむると共に、これが改善更新は一歩を企圖する能力の素地を養うことが、學校に於ける生活による教育の重要な役目である。將來立派な公民となり、立派な社會人となるべき兒童に對しては社會に對して大きな關心を養わねばならぬ。

國內の一般社會の外に、兒童の生れた地方郷土の社會即ち兒童にとりては直接の環境に於ける生活狀況は、兒童が直接に關心を感じるものであるから、教育的に大にこれを活用せねばならない。學校生活が即ち兒童自身の生活であると感じしむるにも、この地方郷土の社會生活の活用如何によること

が頗る多いと思ふのである。又家庭という社會に於ける教育は、ペスタロッチーの言うように、凡へ

ての教育の基礎であるから、父兄は家庭の生活を教育的ならしめ、また進んで学校と連絡し、家庭学校社會が一體となつて教育の充實を圖らねばならない。英國や米國に於けるような父兄母姉と教師の連絡協力に力めつつある協會の如きものが我が國にも望ましいものである。

民主社會が秩序正しく成立し發展するには、人間の本性である所の眞實性、其の具體的な基本の作用としての信、敬、愛、行の働きによらねばならない。自他相互に依存し、個人は全體のために、全體は個人のために親和協力して福祉の増進に力めねばならない。學校の生活自體もこの精神を基本とする民主的な生活であつて、民主的な人格を養成することに役立つたねばならない。

人を見たら泥棒と思えという市井の言葉は、民主社會から抹殺されねばならない。人は皆神性に恵まれ、佛性をもつて居るのであるから、人を見たら神と思え、佛と思えというのが當然でなければならぬが、其處まで急に飛躍が出来なければ、少くも人を見たら人と思え、人格をもつて居るものと思えということは絶対に必要である。社會生活の各方面に於て信という精神が充ちて居らなければ、實際的な信義の生活も覺束ない。海外貿易などに於ても信用を失つたら、日本の再建は不可能である。

孔子は論語に於て、政治の要諦として、兵を撤しても、食を缺いても、信というものは絶対に缺いてはならないと教えた。爲政者と民衆との間に信を缺いたら政治が不可能となるからである。獨り政治のみではない。一般に信というものがなければ、最早人間ではないのである。信がなければ文化の創造も絶対に不可能である。

信は社會生活を構成する細帯であつて、これなくしては、社會は絶対に成立しない。發展も出来ない。信の最も深いものは宗教的信仰であるが、人を信じ、人から信じられないものは神を信ずることも出来ない。神を信する前に先づ人を信じ、人から信じられねばならない。我が國の社會の現状では人を疑うことが甚だしい。猛省すべきである。敬愛愛敬の精神も其の最高峰は絶對者に對する敬愛であるが、これまた、人間相互、人格相互の敬愛愛敬が先ず以て必要である。又事物に對する敬愛の精神は其の事物の本性を發揮せしむるに必要である。廣く事物についてこれを粗末に取扱わず、眞面目に眞心を以て敬重し、愛護し、愛育する所に事物の本性も明かとなり、文化の創造も可能となるのである。これ等の點については私の近著「民主教育の本質」に於て詳述して居るから、ここには重ねて

説くことを見合わせる。

ベスタロッチーは常に經濟生活に苦しめられた。彼は出来るだけ自營的にやつたが、當局からの補助をも請願して居る。學園の生活に於ては園藝などを相當にやつたが、學園の經營に對しては、其の效果は極めて小さなものであつたろう。彼は社會に於ける自立自主の生活に對しても大に考えていたのであるが、其の勤勞的勞作を主として宗教的、道德的なるものを基本としての市民生活に必要なものと考え、經濟的な自營的獨立の精神を養うということについては、十分でなかつた。新日本に於てはわれわれはこの農耕や、工作其他の勤勞的勞作の生活に重きを置き、子供の自營的な經濟精神をも涵養せねばならない。これは實に立派な人の道の教育であり、又この勤勞の過程の中に、宗教的情操や、色々の徳性や種々の知能や、身體の教育も出来るのである。

親は工場で働き、會社や役所に出勤し、家庭では生産的の仕事がなく、主として消費生活である。子供には消費への興味が養われ生産には無關心となる。デューイが往年シカゴ大學の附屬小學校に於て、生産的な勞作教育を試みたのもこの點を憂慮し、米國の少年に生産創造の精神を養わんとしたの

である。師弟が協力して生産したものは、或はこれを學校の生活に於ける食糧として利用する場合もあるうし、或はこれを他に譲渡し販賣する場合もあるであらう。販賣する場合には、相當な適正な利得を得ることは差支がない。そしてそれがたとえ僅少であつても、學校經營の一部に充當されるならば、自營的な經濟精神の涵養に對しても具體的な有効な方法となるのである。従來の教育では利得とすることは教育ではないように輕視され、嫌惡されたが、適正な正當な利得とすることは、勤勞から生ずる自然の結果である。勤勞其のものは人間的、道德的のものであるが、法外でなく不當でなく、適正な正當の利得を得るということは經濟的道德である。利得の性質や、其の適正なる程度について教育することは公民の教育上決して輕視すべきではない。ベスタロッチーはこの點に於ては、時代の影響もあり、又自分の沒我的奉仕に熱心なるために、餘り注意を拂わなかつたようである。要は農耕工作其他の勤勞的勞作は實に全人教育に不可欠の教育であつて、學校という社會生活の基調をなすべきである。勿論敬虔心のない所には勞作も起つて來ない。敬虔心は學校生活の最も根本的な基本であるが、フレイベルが喝破したように勞作なしの宗教は夢のようなものである。併し宗教なしの勞作

は人間を駄馬にするものである。この事は勤勞的勞作と敬虔心との關係に於ても同様である。斯かる點に注意を拂いながら、將來の學校生活は消費の學校より生産創造の學校生活に進まねばならない。

民主社會にあつては個人の人格の尊嚴が保證され、自由平等、責任が要求され、常に眞理と正義を愛し、秩序を重んじ、又寛容博大の精神が要望されるのであるが、これ等は口や耳のみの教育では徹底を缺くのである。自由や責任の意義を説く前に、これ等を學校の生活に於て、生活として體驗せしめねばならない。勤勞的勞作の生活は事實を通して生活を通してこれ等重要な性格を作り行くものである。

學校という社會の生活は同時に兒童自身の生活であらねばならない。兒童は學校の生活によりて自然に體驗的に教育されて行くべきであるが、夫れが同時に彼等自身の自然の生活であると感ずるようなものでなければならぬ。學校を嫌つたり、學校から遠ざかろうとするような氣分が起るのは、彼等の生活と學校の生活とが、別々に二元的になつて居るからである。二元的になつたら、最早教育は行われないことになる。ベスタロッチーの學園は此の點に於て成功したものと云われよう。

學校という社會生活の中には、其の實行すべきこと、問題として研究も解決すべきこと、理想として進むべき方向等多岐多様に亘るものがあるのであるが、兒童自らをしてそれ等が自分達の生活其のものと感ぜしむるには、出来るだけ、兒童の自發活動を重んじ、自分が爲し得る、自分が出る、自分で喜んで試みるという風に躰けて行かねばならない。それが又社會生活に於ける個人の自律的性格を作る所以でもある。人間の本性としての眞實性は各自には、其の個性を通して發揮されねばならない。教育者は謙虛で、自己の人格の弱點を反省し、自己の個人的な偏狹な考を彼等に強いてはならない。愛の教育は愛せられるものの本性を彼等自身、彼等の内から伸ばすように導くことである。ベスタロッチーの學園は此の方面に於て、其の當時の模範學園であつた。

第十章 獨逸及米國に於けるベスタロッチー精神

一、獨逸の復興とベスタロッチー

獨逸に關することは、餘りに有名で人の知る所であるから簡単に述べることにする。

ナポレオンに擊破された獨逸は、其の復興の重要な政策として、柏林大學を起した。而かも大學教育の基礎は國民全體の初等教育である。殊に亡國の復興は少教者の力では不可能である。國民全體の總力に俟たねばならない。ここに目覺めた獨逸の青年教師は争つてベスタロッチーの許に走り、プロイセンの王は私費を授じて留學生を送つた。哲學者フイヒテは「獨逸國民に告ぐ」の獅子吼に於てベスタロッチーの教育精神について血の叫びを以て國民に訴えた。彼はベスタロッチーが實行した多少細かな教育法をも紹介し批判したが、フイヒテの根本精神は實にベスタロッチー精神の獨逸化であると言つてもよい。獨逸の敗戦の最大原因は國民の利己主義であると喝破した。

フイヒテは千八百六年、「現代の特質」という講演に於て、理性の發達する段階を五段に分けて説いて居る。第一段は理性が本能に支配されて居る時代である。此の時代には人間にはまだ罪惡というものがない。第二段は外界の權威から支配されて居る状態で、罪惡がだんだん現われてくる。第三段目は開放時代である。眞理に對して冷淡であり、進路の目標もなく、罪惡の最も大なる時代である。第四段は科學的の時代である。學問の時代である。眞理が最高のものと認められ、眞理が最も愛される時代である。罪惡がなくなつて正しい生活がはじまる。第五段は藝術的の時代である。正しく圓滿に調和せる理性の眞實の姿に達する。完全な正しい聖なる生活である。

ナポレオンに擊破された獨逸は、此の理性發達の段階に於ける第三段目に居つたのである。外界の權威から開放されたが、そして多少自覺の域に入つたが、未だ眞の自覺に到達しては居らない。生意氣な時代である。進路に對する正しい目標もなく、全く氣儘な殊に利己的な時代である。フイヒテは殊に國民の利己的な態度について鋭く猛省を促がした。強い善良な意志、眼前の利害に動かされない

所の、眞理と正氣を愛する國民に鍛え直さねば獨逸の復興は不可能である。天上の宗教を地上の生活の中に生かさなければ眞實の人道とはならない。この新教育の方針を以て國民全體に機會均等的に義務的に教育を普及せねばならぬと絶叫した。これは實にベスタロッチーの事業と思想其のものである。敗戦日本の現状を見詰めて其の復興に邁進しつつあるわれわれもまたこれ等の點に目覺めねばならぬのではないか。

二、獨逸戦争後の米國の教育とベスタロッチー

米國に於ては英國から獨立した以後約三十年は、主として經濟上の方面に於ける復興に大きな力が注がれたのであるが、十九世紀の初めに至り、國家人民の興隆の基礎としての初等教育革新の必要を痛感した。マクリュアという人が、政治上、經濟上の交渉委員として佛國へ派遣されたが、彼は同時に教育文化の方面に於ける歐洲の事情調査の役目をも委託されたのである。彼は偶然の機會に巴里に於てネーフの經營している孤兒院を見學して彼からベスタロッチーのことについて聞き大に感動し

た。ネーフは前に述べたように、會つてナポレオン軍の兵となり、二十六歳の時に伊太利で負傷して最早軍人として働くことが出来なくなつた。ベスタロッチーの書物を読み大に感激して、ブルグドルフのベスタロッチーの學園へ赴き、體操、唱歌、佛蘭西語などを教え、常に子供達と親しみ、ブルグドルフ學園の教師の間では最も人氣がよく、子供達から慕われていたのである。一三年教職に居り、千八百三年頃に巴里へ歸り、ベスタロッチー精神に基づいて孤兒院を經營し、非常に評判がよく、ナポレオン自身も會つてこれを視察したことがある。其の時マクリュアはナポレオンの顔を見ようとして此の孤兒院へ行き、それが奇縁となつてネーフと知り合い、ベスタロッチーのことを聞くというような徑路だつたと言われて居る。

マクリュアは千八百〇四年と五年とに二度ベスタロッチーを訪問した。會つてベスタロッチーと親しみもあり、争をもなしたフェレンベルグのホーフウィルの學園をも見たが、其の貴族的な階級的な教風に嫌氣を起こし、ベスタロッチーの學園の民主的教風に感動した。そしてベスタロッチーに對し米國へ渡つて新教育の基礎を築いて呉れと申出た。ベスタロッチーは自ら渡米することが出来ないの

で、巴里に居るネーフを推舉した。ネーフは千八百六年に米國のペンシルヴァニア州の首都フィラデルフィアに渡り、最初約三年間は英語を學び、教授法の著書をなし、千八百九年に愈々學校を開いて授業を始めた。元來このペンシルヴァニア州というのはウィリアム・ペンという英國人の創設せる殖民地である。ペンは牛津大學の學生時代から熱心なクエーカー宗の信者であるが、其の父の御蔭で英國のチャールス二世から此の地方を貰い受けたのである。彼は此の地方を自ら視察して其の廣く深い森林地帯であることが大に氣に入つて、これを古代伊太利語の森の神という言葉をとつてシルヴァニアと名づけたのに對し、チャールス二世の厚意によりペン家を記念するためにペン・シルヴァニアという州名となつたものである。そして、ペンは豫ねての宗教上の理想を實現する立派な首都を作る積りで、首都をフィラデルフィアと名づけたのである。これはフィル・アデルフィアであつてフィルといふことは希臘語では愛という意味で、アデルフィアは同胞という意味である。即ち彼は神の意志と一致するような立派な首都となさんために、同胞愛という名を首都に與えたのである。これは實に千八百八十一年のことである。ベスタロッチーの民主的な教風は實に先ず以て此の同胞愛のフィラデルフ

ィアに於て樹立されたことは意義深いことである。ネーフが此の地へ渡つたのは千八百二年で、獨逸はナポレオンに撃破されて敗戦亡國の運命に陥つた年であり、千八百七年から八年にかけては、フィヒテが十四回に亘る「獨逸國民に告ぐ」の獅子吼に於てベスタロッチー精神を叫んだのである。獨逸に於ては敗戦國の復興のために、米國に於ては戰勝國としての基礎を固めるために、ベスタロッチー精神が採用されたのである。イヴュルトン學園に於けるベスタロッチーも微笑んだことと思われる。さてネーフはフィラデルフィアに於て四年間熱心にベスタロッチー主義の教育を實施して大に成功した。斯くて彼は其の後二ヶ所に轉じ、又數年の間田舎に引つ込んで農業に従事し、千八百二十五年五十五歳の時に、インディアナ州のニューハーモニーの學校に招聘され、三年の後、學校の閉鎖と共に職を退き、一二ヶ所に職を奉じ、千八百三十四年に再びニューハーモニーに歸つて教育に従事し、千八百五十四年七十四歳で此の地に於て歿したのである。

元來マクリニアという人はスコットランド出身の商人であつて、千八百三年以來フィラデルフィアに定住したのであるが、彼は一方に非常な學問好きの人で、米國に於ける地質學を研究し、地質學協

會の最初の會長にも推されたが、英國のロバート・オーエンの社會改造の理想に共鳴し、相協力してインディアナ州にニュート・ハーモニーという理想郷を造る計畫を立て、其處にネーフを招聘したのである。

米國に於けるベスタロッチ精神の活躍に對しては、ニューイングランドの教育行政官として献身的努力をなせるホレイス・マンの成績も忘れてはならない。彼は千七百九十六年にマサチューセツ州のフランクリンの農家に生れ、十三歳の時に父を失い、母を助けて農業に従事し、親友に書面を認むる時間が自分の唯一の遊戯時間であつたと彼が後年述懐せる程二六時中非常な努力で家事に精勵したのである。其の傍ら學問の勉強に意を用い、會ては小學校の先生ともなつたことがある。二十七歳の時に辯護士となり、其の後州代議院の議員に選ばれ、教育、宗教、慈善事業などの方面に關して研究を怠らず、其の間歐洲へ旅行して親しく文化や教育の事業をも視察してゐる。千八百三十年より千八百四十年に至る十年間は米國に於ける工業革命時代とも稱せられ、馬力や水力が蒸氣力に其の地位を譲り、機械工業がだんだん隆盛に赴くようになったのであるが、其の頃から早くも労働問題を起し

て來り、ボストンに於ては農民や労働者の會合を見るに至り、此の人達の子弟の教育問題についても意見が戦わされ、教育の機會均等の聲が高まつて來たのである。マサチューセツ州にては率先してこれが促進に當らんとして、ホレイス・マンに交渉して教育行政官として盡力して呉れるようにと希望したのである。マンにとつては、其の地位は現在の自分の地位よりも低いのであるから、友人達はこれを拒否するように勧めた。併し豫ねて教育の革新に熱意をもつていたマンは此の求めを甘受して鋭意教育の刷新に努力した。これは千八百三十七年で彼の四十一歳の時である。彼はベスタロッチの教育愛、人間愛の民主的な精神を教育界に吹き込むと同時に、其の直觀教授の方法を奨励し、私財を投じてまでこれに必要な資料を整備したのである。

ニューヨーク州のオルベニーに模範師範學校が創設され、マンは校長の推舉を頼まれた。其の頃中學の先生であつたページが選に當り、千八百四十四年に三十四歳で校長として赴任し、其の死するまで四ヶ年の間非常な努力で、大きな成績を残した。千八百四十七年に彼が公にした「教授の理論及實際」は其の當時米國の教育界で最も多く讀まれた書物であり、明治九年には日本で蘭人のファンカチ

ールによりて翻譯出版されたのである。此の著書の一節に世界の模範的人物として、孔子、ソクラテス、プラトーン、アリストテレス、セネカ、アッシャム、ミルトン、フランシス・ベスタロッチー、トーマス・アーンホルドなどが挙げられて居り、ベスタロッチーもこれによりて日本に紹介されたのである。

ベスタロッチー精神を米國に紹介した人では、ヘンリー・バーナードの如きも顯著な人である。彼は學者であつて、教育の實際に當り、又教育行政官であつた。教育雜誌の記者でもあつた。講義に論文に數々のベスタロッチーに關するものを公にしたのである。

ニューヨーク州のオスエゴの州立師範學校長シエルドンは、夙にベスタロッチーの教育精神に共鳴し、クリュージエという人を招き熱心にベスタロッチー主義の實行に力を盡した。このクリュージエは、ブルグドルフの時代からベスタロッチーと協力し、其の學園の忠實な教師であり、最後にニードラーと共に、ベスタロッチーのイヴエルドン學園を去り、後年スピスの師範校長として名聲を博したクリュージエの息子である。日本の教育界の大先輩であつて、東京女高師の校長を勤めた高嶺秀夫

氏は明治八年に此のオスエゴの學校に入學したのであるが、其の時にはクリュージエは在動中であつたので、高嶺氏はシエルドン校長やクリュージエからベスタロッチーの教育精神に關して指導を受けたのである。

米國ではこれ等の人の外に、ハリスやアルコットのような知名の教育家や學者の中でベスタロッチーに共鳴して、其の精神の普及に力を盡した人は、相當の數に上つて居る。

彼はベスタロッチーの教育精神は米國に於ては先の、同胞愛の都であるフィラデルフィアに傳はり東北部の清教族の根據地であるボストン附近の理想主義の文化領域に堅い根をおろし、オスエゴやハリスの定住せるセントルイスなどを中心にして、米國の初等教育の基礎を築き上げたのである。米國の民主主義的教育の發展に對し、ベスタロッチーの影響は實に甚大なものがある。

第十一章 我が國に於けるベスタロッチー研究

一、研究の實況

日本に於けるベスタロッチー研究の主なるものについて一瞥を與えよう。

明治十六年に、東京師範學校の教諭若林虎三郎氏と其の附屬小學校の訓導平井毅氏の合著として「改正教授論」という書物が出版された。其の後二三年経つて、ベスタロッチーの思想を相當に加味した米國のジョホノットの教育學が高嶺秀夫、有賀長雄兩氏によつて翻譯された。これ等は開發教授法として教授法の改善に役立つたのであるが、ベスタロッチーの人格や其の教育の根本精神については未だ多く語る所がなかつたのである。明治二十年に出版になつた杉浦重剛氏の「ペインターの教育令史」は稍此の方面に説き及んで居るが、主として此の方面に力を注がれたのは明治三十年に出版になつた澤柳政太郎博士の「ベスタロッチー」である。これは主として既に度々述べた所の、ベスタロ

ッチーの門弟ツガンのベスタロッチー傳に據つたものである。而かも博士は其の當時前橋中學の校長であり、其の學校に非常な俊才で學資に困つて居るものがあつたので、此の青年を救うために書かれたもので、其の動機は全くベスタロッチーの精神其のものである。この青年は不幸にして途中で病死したのは残念なことであつた。其の後ベスタロッチーに關して研究せる書物は、約三四十種に及んで居る。殊に玉川學園出版のベスタロッチー全集六卷は、教育界に對する非常に大きな貢獻である。學者としては長田新博士、福島政雄博士の學位論文はベスタロッチーに關する研究であり、兩氏の研究は斯界に甚大な影響を與えて居る。長田博士はベスタロッチー傳としての世界的名著、モルフのベスタロッチー傳を翻譯して五卷となし、此の方面の研究に豊富な貴重な材料を提供された。先年瑞西政府は同博士のこれ等の效績を表彰し、東京に於ける瑞西公使館に於て表彰式が舉げられた。私自身も微力ながら過去四十年に亘つて、ベスタロッチー研究の推進に力めたといふので、この表彰式に招待される光榮に浴したのである。

日本の文化は日本の特性をもちながら、世界的に普遍であるように發展せなければならぬ。教育

も同様であつて、日本的な個性、特殊性をもちながら、其の教育が世界的に人類に價值あるものでなければならぬ。われわれは偏狭や、獨善に陥らないで、世界的に價值あるものについては、これを播取しなければならぬ。教授上の細かな方法などについては、今日はベスタロッチーの主張し、實行したものよりも進歩して居るものが少くはないと思ふが、彼の純眞にして切實なる兒童愛、人類愛は實に萬世の師表であると言つてもよいのである。新日本建設の途上にあるわれわれは、ベスタロッチー精神を再検討して、文化國家、平和國家の建設に力めたいものであると思ふ。

二、ベスタロッチー精神をすべての人に

ベスタロッチーの教育思想は思想のための思想ではない。自ら實行せる人間救済の告白である。學究的な知性の産物ではない。世の嘲りと困苦と戦いつつ、其の信念を貫き、其の理想の實現に邁進せる全我的な魂の表現であり、血潮の滴りである。其の發表せる數多き書物や論文の中には、ニーデラーが哲學的に、組織的に粉飾したるものも數種あるが、それはベスタロッチーの欲する所ではなかつた。

後世の學者が、彼の思想を研究して、哲學的乃至教育學的な體系を作らんとすることは、學術的に研究するという立場から見れば、まことに美しいことであり、獎勵すべきことである。

併しベスタロッチーは教育家や、教育學者によりて專有されてはならない。哲學は論理の遊戲ではない。少くとも人生に於ける意義と價值とを見出ださんとする使命をもつものならば、ベスタロッチーの生涯の事業や其の思想からの洗禮を受けなければならぬ。ベスタロッチーはフイヒテと會談の時に、ベスタロッチーの思想にはカントに近いものがあると言われて、喜んだということであるが、彼こそ實にカントの實踐理性の意圖する所の原理を自ら實踐して、生涯其の到らざることを常に反省し苦惱したものである。カントを経ずして哲學の研究が不可能ならば、ベスタロッチーを経ずしてはカント哲學の生きた魂に觸れることは出来ないと言いたいものである。ベスタロッチーは教育學徒の私有物ではない。彼の事業や、思想は、實に哲學々徒の飲むべき聖なる泉である。これによりて形式的な哲學は人間の生命として活躍することが出来るのである。

社會の革新、貧民の救済のために生涯を献げた彼の事業は、社會學研究の學徒に對する生きた資料である。社會教化のために奉仕する人々のための生きた模範である。社會、國家の福祉増進のために力を盡くす爲政者の人々よ。ベスタロッチーを研究し、彼が實行せる没我的な親心に徹して眞實なる爲政力の教養に培えよ。藝術家よ。この教聖の生涯を藝術化して人間愛のうるおいを人生に普ねからしめよ。グロープ其の他の畫家は、夙にシュタンプに於ける教聖を藝術化して不朽のものとなして居るではないか。ベスタロッチーの精神は實に人類全體が景仰し、讚美すべきものである。世界の兒童教育や、青年の教育に於て、社會科の教材として、最も貴重なる一つである。人類が實際社會の一人前の社會人として、一人前の公民として生活する以前に、其の修學時代に於て、其の程度に應じて、必ず學ばねばならないものである。新日本建設の礎を握る所の日本の青少年は、ベスタロッチー精神を體得して奮起すべきである。

9903

昭和二十二年十一月十五日印刷
昭和二十二年十一月二十日發行

定價 金九十圓

著者 小西重直
發行人 竹下直之
發行所 西荻書店

新日本建設と
ベスタロッチー

版權
所有

發賣元
印刷所

東京都杉並區西荻窪二ノ六九
振替口座東京一六八一一五番
電話 荻窪一五二一三〇七番
日本出版文化協會會員番號 A 二二四二二二番
日本教育圖書株式會社
東京都文京區白山御殿町一〇
鐵道弘濟會 東京印刷工場
東京都台東區上野山下町二

西 荻 書 店 發 行

新 教 育 叢 書

- | | | | |
|-----|-----------|--------------|--------|
| (1) | 小西重直著 | 新日本建設とベスタロッチ | 千價八十圓 |
| (2) | 菅井準一著 | 科學教育論 | 千價二十四圓 |
| (3) | 向山嘉章著 | 教員組合と教員生活 | 千價二十八圓 |
| (4) | 日本民主教育聯盟著 | 新女教師の書 | 千價六十四圓 |
| (5) | 以下續刊 | | |

月刊 教 育 社 會

最も確實に發行する唯一の教育雜誌

半年概算百圓
一年概算二百圓

西荻書店編集部編	學習漢字のしおり	千價十五圓
土方辰三編	新制英習字帳	千價十五圓

年 月 日 4/17

222	491	23. 7. 15			
	210.8				
210.8					

閱覽濟

終



定價九十円